

### 【はじめに】

本論は立教大学が所蔵する「外邦図」に関する調査報告である。これまでわずか1年弱の調査期間しか充てていないが、本論はこれまでの調査結果を中間報告としてまとめたものである。最終的な報告にはほど遠いものであるが、これまでの調査の中間報告の形式でもある程度の価値があると考え、発表する次第である。

### 【外邦図とは】

外邦図とは、広義には、軍事上の目的で日本周辺の国外の地域を対象として製作された地図の総称である。明治時代、日清戦争の時代から朝鮮半島、中国などを対象にして外邦図の製作が始まり、以後、日本の周辺地域を対象に数多くの外邦図が製作された。軍事上の目的でなく製作されたものでも、同時期に製作された国外の地域の地図を外邦図と呼ぶ場合もある。

しかし、通常はより狭い意味で使われ、第二次世界大戦中に日本の陸軍参謀本部がアジアや太平洋地域を対象にして作成した地図を示す場合が多い。この狭義の外邦図の多くは、戦後の連合軍の占領行政のもとでアメリカに接収されたが、接収以前に日本の大学や公的機関に運び出され、現在まで所蔵されるに至ったものがある。

日本全体で4万枚を超える外邦図が存在していると言われていたが、このなかの一部が立教大学に収蔵され、およそ4千枚を数えている。

### 【立教大学への分配経路】

立教大学に収蔵されている外邦図のコレクションは、旧陸軍参謀本部から旧資源科学研究所に運び出されたものがベースとなっている。旧資源科学研究所は、戦前から1971年まで存在した研究所であり、1946年に多田文男氏の指揮下、旧陸軍参謀本部から4万枚を超える外邦図がこの研究所に移された。その後、昭和30年代にこれらの地図は、お茶の水女子大学、京都大学、立教大学、東京大学、広島大学などに寄贈・分配された。立教大学に分配されたのは、1958年に立教大学に「アジア地域総合研究施設」が多田文男、石田龍次郎、別技篤彦らを中心に設立されたことと深く関わっている。

この立教大学への配分については、浅井辰郎氏が文章を残している。浅井氏によれば、立教大学の別技篤彦氏がアジア地域総合研究施設を設立し、その予算で外邦図を購入した

経緯が示されている（浅井 2007）

同年〔1953年〕になって多田、石田竜次郎両先生や日本地理学会が尽力した特別科学研究費により、「立教大学アジア地域研究施設」が設立され、この地図を購入して下さる事になって整理事業は本格化した。（中略、〔 〕は著者の注）

〔外邦図の購入者の〕三番目は、上記のように立教大学アジア地域研究施設の別技篤彦氏で、最初の大口購入申込者であった。昭和三四年(1959)六月と十二月に、インドシナ地域の注文を受け、Cセットから合計二二五四枚を選び出して、八月と十二月に納入、早速に約三四万円の支払いを受けた。一枚単価一五〇円。この支払いにより、労務費の苦労は一気に解消に向かった。なお納品書の控には一枚ごとの地域や縮尺、図幅番号が残っているが、本稿では省略する（以下同様）。

さらに翌年六月には、ボルネオ、タイ、マレー半島、インドネシア、その近海諸島、フィリッピン、ビルマ、インド、ジャワ、豪州の五一六枚を納め、年末に七万七千余円受領。

昭和三六年(1961)二月には、ハワイ、パプア、豪州、仏印の追加注文もあり、三八九枚を納めて、（六月に五万七千円受領。）同じ六月には、東南アジアの残余と海図の注文を受け、七月にその四七三枚を納入して、（約七万一千円受領。）こうして立教大学には三年にわたり、合計で三、六三二枚を納め、五四万四四五〇円を受領した。

十一年後の昭和四八年(1973)六月になって、同大学大学院生吉田正紀君が別技氏の手紙を持って来訪、現地調査用に、別にジャワ島やマカッサル、セレベスの地図を求められた。内、十一枚は間に合ったが、無いものはM2カメラ（後記）で複写し、現像をも同君に頼んだ。

以上のような記述から、立教大学は資源科学研究所から合計で 3,643 枚を購入したことになる（久武・今里氏が 3,632 枚としているのは、吉田氏の分を除いているのであろう）。また以下のような記述が続いている。

ずっと後に出版された別技には「・・・以後、昭和四十一年まで総額千五百万円余の研究費を受け、図書約四千冊、地図類五千枚を整備。」はこれを裏付ける。この「地図類五千枚」は上記より少し多いが、恐らく再請求分や資源研以外からの地図を含むためかと考える。

立教大学の地図収集の特色は、満州、北シナ、南シナを全く含まないことで、四番目の広島大学とはこの点で一線を画している。しかしこれは広島大学にシナをわざと譲られたためかも知れない。別技氏すでに亡く、確かめようもない。

立教大学に残されている目録には、他に民間の業者（内外貿易など）から地図を購入したことが記述されており、この資源科学研究所以外からも地図を購入したことがわかる。

以上のように、当時、立教大学の別技篤彦氏が東南アジア研究を専門としていたことから、東南アジア地域を中心に、太平洋地域、オーストラリアなどの地図が、何回かにわたって購入され、当時のアジア地域総合研究施設（現アジア地域研究所）に整備された。通称「別技コレクション」と呼ばれる地図である。

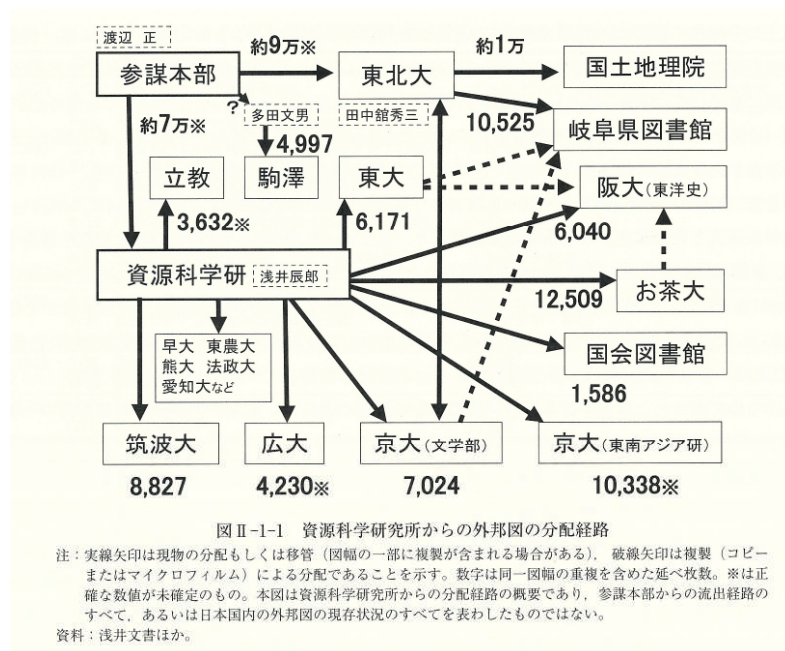


図1 資源科学研究所からの分配系の経路（久武哲也・今里悟之 2009）。

約4千枚におよぶ別技コレクションは、東南アジア、オセアニア、南アジアを主な対象地域としており、旧資源科学研究所から分配された地図と、その後購入したものよりなっている。とりわけ別技氏が専門とした東南アジア島嶼部のコレクションは、植民地政庁が作成した5万分の1の地図をもとにしており、網羅的なものとされている（弘末雅士氏との私信による）。

これらの外邦図は軍事的な目的で作成されたものであることから、当時の植民地政策の研究に重要な資料であるが、それだけでなく、歴史地理学的な研究のためにも、また現地のその後の環境や景観の変動を知るためにも重要な資料となりうる。

## 【立教大学での収蔵状況】

立教大学の外邦図は、以上のように非常に貴重な資料でありながら、これまでほとんど整理・利用がされてこなかった。収蔵の主体はアジア地域総合研究施設であったが、これは他の東南アジア関係資料とともに、図書館の図書とは別の管理下に置かれていた。その後このアジア地域総合研究施設は「アジア地域研究所」となり、学内の組織改編により、立教大学総合研究センターの下でその図書が管理されることになった。外邦図に関しては、空調施設のない作業室に保管され、ほとんど利用されてこなかった。これは立教大学内に外邦図を直接利用して研究をする教員がいなかったことにも原因があると思われる。

その保管状況は地図を保管するには決して十分でなく、劣化が危ぶまれていた。その目録も、5冊の大学ノートに手書きで残されているだけであった。おそらく、これを整理しようとする膨大な作業になることはすぐに想像がつくので、その整理の必要性は認識しつつも誰も手をつけなかったというのが実情だったのだろうと推察される。



写真1. 手書きの目録ノート1

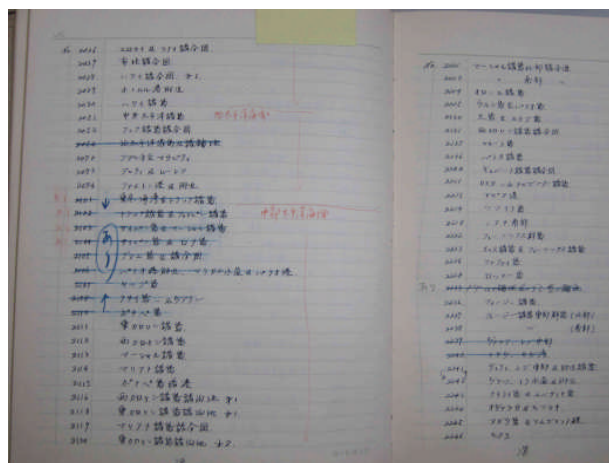


写真2. 手書きの目録ノート2

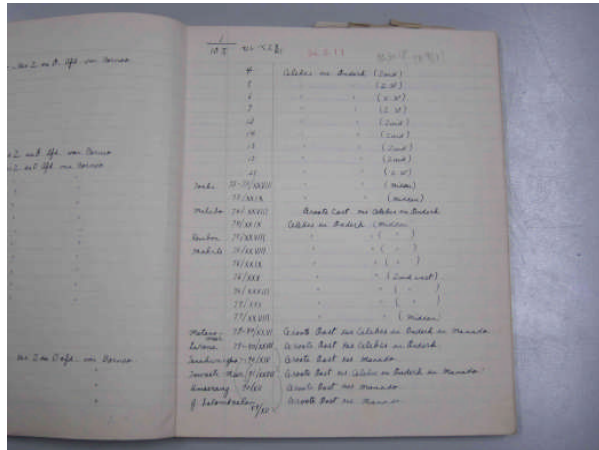


写真3. 手書きの目録ノート3

### 【外邦図整理への動き】

以上のように、立教大学の外邦図はこれまでほとんど利用整理がなされてこなかったのだが、しかし、他の大学・研究機関が所蔵する外邦図に関しては着実に研究が進みつつあり（小林 2009）、立教大学がその整理・研究の動きから大きく取り残されているのが判明してきた。緊急ではないものの地図の劣化が進んでいるのは明らかであり、また立教大学の研究関連施設の大規模な移転に伴い、外邦図が収蔵されている作業室も移転を余儀なくされることもあって、この外邦図への対応を考えざるを得ない状況になった。

以上のことから、外邦図の管理主体となっていたアジア地域研究所のメンバーが中心になって、外邦図の研究作業チームを構成することになった。すなわちアジア地域研究所所員の豊田（パプアニューギニアを中心とする太平洋地域が専門。太平洋戦争に関する研究歴がある）、弘末雅士氏（東南アジア史が専門）、上田信氏（中国史が専門、アジア地域研究所現所長）に、岩田修二氏（自然地理学）である。



写真4. 立教大学外邦図の収蔵状況1





写真5. 立教大学外邦図の収蔵状況 2



写真6. 立教大学外邦図の収蔵状況 3



写真7. 立教大学外邦図の収蔵状況 4



写真 8. 立教大学外邦図の収蔵状況 5

### 【これまでの研究・作業活動】

アジア地域研究所の予算は限られたものであり、地図の整理作業のアルバイト代金を継続的に支払うのは無理であることから、外部の研究助成を求めることとした。幸い国土地理協会の助成に採択され（第 10 回学術研究助成：外邦図コレクションの多面的利用とデジタル化に関する基礎的研究）、資料整理のために資金を使うことが可能になり、作業を始めることとなった。

これまでの研究活動は以下のようになる。

#### 1. 研究会の開催

当面、研究作業チームを中心にして、外邦図の研究会を開催することにした。第 1 回目の研究会は、外邦図に詳しい清水靖夫氏（地図情報センター理事）に依頼して、外邦図に関して概略の説明を受けた。

第 2 回目の研究会では、地図情報の確認作業を依頼している遠藤正之氏に、作業の報告ならびに立教大学のコレクションの特徴について報告を受けた。

#### 2. 目録のデジタル化

手書きで書かれていた目録のデータをパソコンに入力し、これを印刷したものを『立教大学外邦図コレクション目録』として発行した。今後はこれを利用して、立教大学外邦図コレクションの概要把握に努めるとともに、今後の地図の確認作業に利用することとした。あわせてそのデジタル・ファイルを CD-R に収めて、パソコン上での検索を可能にした。これらに関係者に配布した。

### 3. 地図情報の確認、目録データリストの作成

これまで外邦図コレクションについて手書きの目録は存在していたのだが、現物の地図が目録と一致しているのかの確認が必要である。このために地図の現物を1枚1枚調べて、そのコレクションのデータを確認し、目録と一致しているかを調べる作業を始めた。立教大学大学院史学専攻出身で、オランダ語、フランス語、英語が読める遠藤正之氏に、現物の地図の確認を依頼し、2010年度中に約1300枚分の地図のデータが確認できている。目録のデータから推察すると、これは全体の約3分の1と考えられる。今後も作業を続けることになるが、これまでに整理できたデータを印刷して、『立教大学外邦図コレクション目録データ1』として発行した。このデータを全体の概要把握に役立てるとともに、今後の地図の確認作業に利用することとした。あわせてそのデジタル・ファイルをCD-Rに収めて、パソコン上での検索を可能にした。これらも関係者に配布した。

### 4. インデックス・マップの複製

収蔵されている資料を確認したところ、手書きのインデックス・マップが存在していたことが判明した。既に破損が進んでおり、そのままでは利用が難しいことから、このインデックス・マップをカラーコピーして複製を作成した（『立教大学外邦図インデックス・マップ』）。この複製を共同研究者間で配布し、全体の概要把握に努めるとともに、今後の地図の確認作業に利用することとした。



写真9. 手書きのインデックス・マップ1



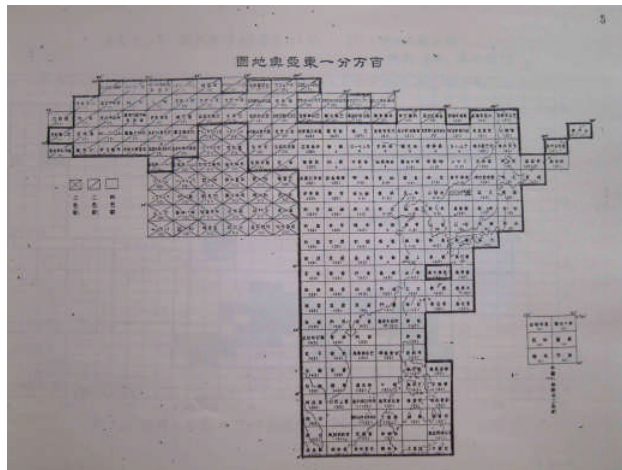


写真 10. 手書きのインデックス・マップ 2



写真 11. 手書きのインデックス・マップ 3

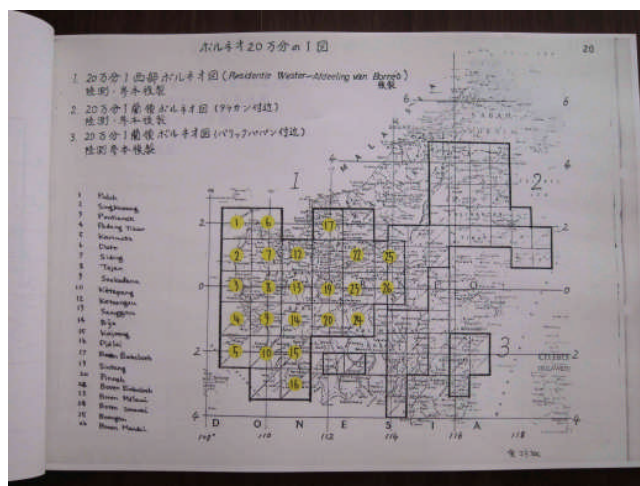


写真 12. 手書きのインデックス・マップ 4

## 5. 他大学との情報交換

外邦図を所蔵している大学は、立教大学の他に、お茶の水女子大学、京都大学、東北大学、東京大学、広島大学などである。既にお茶の水女子大学、京都大学、東北大学ではそのコレクションの目録を完成させており、全容が把握されている。

これらの大学のうち、お茶の水女子大学と東北大学を訪問し、その保管状況、利用・管理状況などの見学・聞き取りをし、今後の保管、整理の参考とした。

2011年2月8日にお茶の水女子大学地理学教室の宮澤仁准教授を訪ね、その収蔵状況と整理状況を見学させていただき、お話を伺った。

2011年2月28日には、東北大学大学院理学研究科を訪ね、その収蔵状況と整理状況を見学させていただき、今泉俊文教授と関根良平助教にお話を伺った。

ともに目録のデジタル・ファイルを借用できることになり、立教大学の外邦図コレクションとかなり重なっていることが予想されることから、今後の作業に役立てることができると期待している。

この他に、大阪大学の小林茂氏とは電子メールで連絡をとり、やはり外邦図の保管、整理の参考とさせていただいた。

### 【立教大学外邦図コレクションの概要】

手書きだった目録をデジタル化したことにより、目録上の全体の概要がつかめるようになった。もちろん、この目録の通りに現物が存在するとは限らないが、コレクションがこの目録にほぼ近いことは予想されるので、これでコレクション全体の概要が判断できると考えられる。

以下、このデジタル化された目録により、立教大学のコレクションの概要について記述してみよう。

目録に記載されている全体の枚数は 4,491 枚であるが、その中で旧資源科学研究所から購入したと推察される地図は 4,247 枚である（表 1 参照）。この枚数は既に報告されている枚数（3,632 枚あるいは 3,643 枚）よりもやや多い。ただし枚数については今後の確認が必要である。手書きの目録の写真からわかるように、文字が後から消されていたり、あるいは情報が地図 1 枚のものか 2 枚以上にわたるものか判別が難しい場合があり、この 4,247 枚という数字が正確かどうかは判断できないからである。

地域別の枚数は表 1 のようになる。これからわかることは、東南アジア、南アジアならびに太平洋地域の地図が中心であること、中国の地図がほとんどないことなどであり、前述した浅井氏の報告を裏付ける。

しかし、枚数の最終的な確認は、実物の地図との照合が必要であり、これは今後の課題である。

表 1. 立教大学の外邦図コレクション地域別枚数

	地域	地図枚数	小計
東南アジア	ビルマ	733	2,580
	仏領インドシナ	220	
	タイ	58	
	英領マレー	126	
	東南アジア島嶼部	1,443	
南アジア	インド	667	728
	セイロン	61	
中国		3	3
ソ連		9	9
オセアニア	オーストラリア	239	388
	パプア	77	
	ハワイ諸島	60	
	その他太平洋	12	
海図		539	539
合計		4,247	4,247

(目録のデジタルデータより筆者作成)

### 【研究活動成果】

これまでの研究の活動成果は以下のようになる。

#### 1. 目録のデジタル化

前述の通り、『立教大学外邦図コレクション目録』（立教大学アジア地域研究所, 2011年3月）として発行することができた。同時に CD 版も発行・配布することができた。

#### 2. 地図情報の確認、目録データリストの作成

前述の通り、『立教大学外邦図コレクション目録データ 1』（立教大学アジア地域研究所, 2011年3月）として発行することができた。同時に CD 版も発行・配布することができた

#### 3. インデックス・マップの複製

前述の通り、『立教大学外邦図コレクションインデックス・マップ』（立教大学アジア地域研究所, 2011年3月）としてその複製を発行することができた。

## 【今後の課題】

幸いにして、今回の研究をきっかけにして、外邦図の研究に対して今後ある程度の研究費が使えることになった。今後の課題は以下のようなになる。

### 1. 目録の完成

既に目録を完成させている他大学（東北大学、お茶の水女子大学、京都大学など）の資料を参考にしながら、それらの様式に合わせて最終的な目録を完成させることが次の目標である。作業は 2010 年度で約 3 分の 1 を終了しており、2011 年度中の完成を目指している。

### 2. グーグルマップを用いたインデックス・マップの作成

現在のインデックス・マップは手書きのものであり、利便性は十分とはいえない。今後は、グーグルマップを用いて web 状にインデックス・マップを作成し、利用しやすい環境を整える。既に作業を始めており、2011 年度中の完成を目指している。

### 3. 地図のデジタル化

現在照合を進めている地図の中には、保管状況が劣悪であったこともあり、触れると破損のおそれもあるような、取り扱いが難しいものもある。地図自体をデジタル化して、通常はデジタル化したデータを利用するような体勢を整えることが理想である。しかし、すべての地図をデジタル化することは手間も費用も膨大である。他大学の地図との重なり状況がわかり、他大学にない立教大学オリジナルの地図の存在が明らかになった場合には、少なくともそれらの地図に関してはデジタル化を実施して、利用の便を図りたい。また立教大学研究者の関心と重なる地域については、進んでデジタル化を進めて利用することも考慮している。

### 4. 地図の保管方法の検討

約 4 千枚と言われている立教大学の外邦図コレクションは、現在劣悪な条件の下で収蔵されており、その環境整備が急務である。今後、図書館など学内の他部局と協力をしながら、保管ができる環境を整えていく予定である。

## 【参考文献】

浅井辰郎 2007「資源科学研究所の地図の行方—多田文男先生の英断」（お茶の水女子大学文教育学部地理学教室『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』お茶の水女子大学文教育学部

地理学教室.

小林茂編 2009『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域 - 「外邦図」 へのアプローチ - 』  
大阪大学出版会.

豊田由貴夫 2011「アジア地域研究所が所蔵する『外邦図』について」『なじまあ』(立教大  
学アジア地域研究所) No.01, pp. 16-17.

久武哲也・今里悟之 2009「日本および海外における外邦図の所在状況と系譜関係」(小林茂  
編 2009『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域 - 「外邦図」 へのアプローチ - 』大阪  
大学出版会) , pp.32-46.

立教大学アジア地域研究所 2011『立教大学外邦図コレクション目録』立教大学アジア地域  
研究所.

立教大学アジア地域研究所 2011『立教大学外邦図コレクション目録データ 1』立教大学ア  
ジア地域研究所.